

講談社 青い鳥文庫

坊っちゃん

夏目漱石

福田清人/編 斎藤博之/絵



講談社 青い鳥文庫 69-1

坊っちゃん

夏目漱石
福田清人 編

1983年10月10日 第1刷発行

1993年12月10日 第29刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112-01

電話 出版部 (03)5395-3536

販売部 (03)5395-3625

製作部 (03)5395-3615

N.D.C. 913 236p 18cm

装丁 久住和代

印刷 図書印刷株式会社

製本 図書印刷株式会社

© KIWOTO HUKUDA 1983

Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上
での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-147125-2 (児庫)

(落丁本・乱丁本は、講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。)

■この本についてのお問い合わせは、講談社児童局
「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

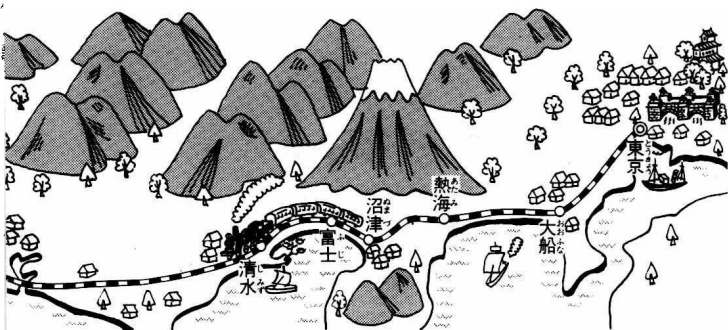


坊っちゃん



夏目漱石／作

福田清人／編 斎藤博之／絵



もくじ

第一編 わんぱく時代

いたずらっ子

..... 5

下女の清

..... 11

ひとりだち

..... 17

卒業

..... 21

第二編 ぼっちゃん、先生となる

四国の中学

..... 26

あいさつまわり

..... 33

はじめての授業

..... 42

こっとうぜめ

..... 46

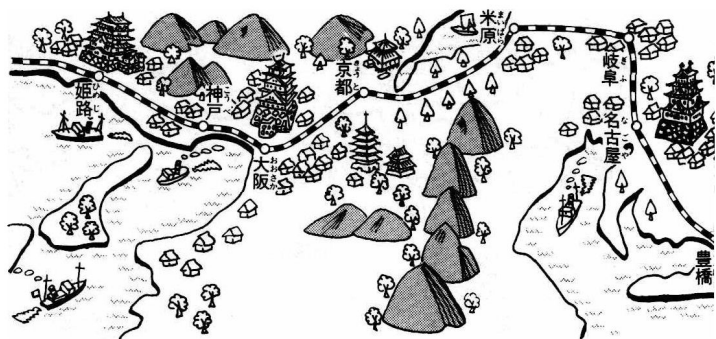
てんぷら先生

..... 51

第三編 こまった生徒たち

宿直

..... 59



第四編 職員室

ばった事件	63
とっかん事件	71
つりあそび	80
赤シャツのかげ口	89

第五編 きのどくな先生

山あらしとけんか	99
職員会議	107
ひっこし	119
下宿のばあさん	122
清の手紙	126
湯の町へ	131
増給事件	140
きのどくな先生	147
うらなりの転任話	151
赤シャツの家へ	157
山あらしとなかなおり	157



第六編 ぼっちゃんあばれる

うらなりの送別会
祝勝会

すきやき
余興

185 180 174 165

中学と師範のけんか
新聞記事

山あらしの辞職

赤シャツたいじ

帰京

220 207 199 194 188

解説
夏目漱石の年譜

福田清人

232 223

第一編 だいいへん わんぱく時代 わんぱくじだい

いたずらっ子

親おやゆずりのむてつぼうで、子どものときから、そんなばかりしている。

小学校にいるじぶん、学校の二階かひからとびおりて、一週間しゅうかんほどこしをぬかしたことがある。

「なぜ、そんなむちやをした。」

と聞きく人があるかもしれない。べつだん深いわけでもない。新築しんちくの二階かひから首くびをだしていたら、同級生きゅうせいの一人ひとりがじょうだんに、

「いくらいばつても、そこからとびおることはできまい。よわむしやあい。」

とはやしたからである。小使こづかいにおぶさつて帰かえってきたとき、おやじが大きな目をして、
「二階かひくらいからとびおりて、こしをぬかすやつがあるか。」
といったから、



「このつぎは、ぬかさすにとんでみせます。」と答えた。

親類のものから、西洋でできたナイフをもらって、きれいな刃を日にかざして、友だちに見せていたら、一人か、

「光ることは光るか、切れそうもない。」といった。

「切れぬことがあるか、なんでも切ってみせる。」

とうけあった。

「そんなら、きみの指を切ってみろ。」

と注文したから、

「なんだ、指くらい、このとおりだ。」

と、右の手の親指の甲を、はすに切りこんだ。さいわい、ナイフが小さいのと、親指のほねかたかったので、いまだに親指は手についている。しかし、きすあとには死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩にいきつくすと、南あかりに、いささかはかりのやさしい畑があつて、まん中に、くりの木が一本立っている。これは、命よりたいじなかりた。実のじゆくするじぶんは、起きぬけにうら門をでて、落ちたやつをひろってきて、学校で食う。

やさい畑の西がわが、山城屋という質屋の庭つづきで、この質屋に、勘太郎という十三、四のせかれがいた。勘太郎はむろんよわむしである。よわむしのくせに、四つ目かきをのりこえて、くりをぬすみにくる。

ある日の夕がた、折り戸のかけにかくれて、とうとう勘太郎をつかまえてやった。そのとき、勘太郎はにげ道をうしなつて、いっしょうけんめいにとびかかってきた。

むこうは、二つばかり年上である。よわむしだが、力は強い。はちのひらいた頭を、こっちのむねへあてて、ぐいぐいおしたひょうしに、勘太郎の頭かすへって、おれのあわせのそでの中にはいった。じやまになつて、手が使えぬから、むやみに手をふったら、そでの中にある勘太郎の頭が、左右へぐらぐらなひいた。しまいに苦しかつて、そでの中から、おれの二のうでへ食いついた。いたかつたから、勘太郎をかきねへおしつけておいて、足をかけてむこうへたおしてやつた。

山城屋の地面は、やさい畑より六尺（やく一・ハメートル）がた低い。勘太郎は、四つ目かきを半分くずして、じぶんの領分へまっさかさまに落ちて、

「ぐう。」

といった。勘太郎が落ちるときに、おれのあわせの片そてかもげて、きゆうに手か自由になつた。その晩、母が山城屋にわびにいったついでに、あわせの片そてもとりかえしてきた。

このほか、いたずらはだいぶやった。

大工の兼公とさかな屋の角をつれて、茂作のにんじん畑をあらしたことがある。にんじんの芽がでそろわぬところへ、わらがいちめんにしてあったから、その上で、半日、三人ですもうをとりつづけにとつたら、にんじんがみんなふみつぶされてしまった。

古川のもっているたんぼの井戸をうめて、しりをもちこまれたこともある。太いもうそうだけのふしをぬいて、深くうめた中から水かわきでて、そこいらのいねに水かかかるしかけであった。そのじぶんは、どんなしかけか知らぬから、石やぼうちぎれを、ぎゅうぎゅう井戸の中へさしこんで、水がでなくなつたのを見とどけて、うちへ帰つてめしを食っていたら、古川がまっかになつてどなりこんできた。たしか、罰金をだしてすんだようである。

おやじは、ちつともおれをかわいがってくれなかった。母は兄ばかりひいきにしていた。おれを見るたびに、

「こいつは、どうせろくなものにはならない。」

と、おやじがいった。

「らんぼうでらんぼうで、ゆくさきかあんじられる。」

と、母がいった。なるほど、ろくなものにはならない。ごらんのとおりのしまつである。

母が病気で死ぬ二、三日前、台所でちゅうがえりをして、へつつい（かまど）のかどであればらば



ねをうって、おおいにいたかった。母がたいそうおこって、

「おまえのようなものの顔は見たくない。」

というから、親類へとまりにいつていた。すると、とうとう死んだという知らせがきた。そう早く死ぬとは思わなかった。

（そんな大病なら、もうすこしおとなしくすればよかった。）

と思つて、帰つてきた。そうしたら、れいの兄がおれを、

「親不孝だ。おまえのために、おつかさんが早く死んだんだ。」

といった。くやしかったから、兄の横つつらをはって、たいへんしかられた。

母か死んでからは、おやじと兄と三人でくらしていた。

兄は、

「実業家になる。」

とかいって、しきりに英語を勉強していた。かんらい、女のような性分で、するいから、なかなかなかった。十日に一ぺんくらのわりで、けんかをしていた。

あるとき、しょうきをさしたら、ひきょうなまちごま（王将のにげ道に、まちぶせのこまをうつこと）をして、人がこまると、うれしそうにひやかした。あんまりはらがたつたから、手にあつた飛車を、みけんへたたきつけてやった。みけんがわれて、少々血かでた。兄がおやじにいいつけた。

おやじかおれを、勘当するといいたした。

下女の清

そのときはもうしかたかないとあきらめて、先方のいうとおり、勘当されるつもりでいたら、十年來めしつかっている清という下女が、なきなからおやじにあやまって、ようやくおやじのいかりがとけた。

それにもかかわらず、あまりおやじをこわいとは思わなかった。かえって、この清という下女にきのどくであつた。この下女は、もとよい家がらのものだったそうだが、徳川幕府が瓦解（くす）れるしたときにおちぶれて、ついに奉公までするようになったのだと聞いている。だから、ばあさんである。このばあさんがどういいういんねんか、おれをひじょうにかわいかけてくれた。ふしぎなものである。

清はときに台所で、人のいないときに、「あなたはまっすぐで、よいご気性だ。」

とほめることが、ときどきあつた。しかし、おれには、清のいう意味かわからなかった。（よい気性なら、清いがいのものも、もうすこしよくしてくれるだろう。）

と思つた。清がこんなことをいうたびに、

「おれは、おせじはきらいだ。」

と答えるのがつねであつた。すると、ばあさんは、

「それだから、よいご気性です。」

といつては、うれしそうにおれの顔をながめている。

母が死んでから、清はいよいよおれをかわいがつた。

おりおりは、じぶんのこづかいで、きんつばや紅梅焼を買つてくれる。寒い夜などは、ひそかにそば粉をしいれておいて、いつのまにか、ねているまくらもとへ、そば湯をもつてきてくれる。

ときには、なべやきうどんさえ買つてくれた。ただ、食いものばかりではない。くつやたびももらった。えんぴつももらった。ちようめんももらった。これは、すつとあとのことであるが、金を三円（当時の一円はいまの三千五百円ぐらいにあたる）ばかりかしてくれたことさえある。なにも、かせといったわけではない。むこうでへやへもつてきて、

「おこづかいなくておこまりでしょう、お使いなさい。」

といつてくれたんだ。おれはむろん、

「いらない。」



といったが、

「ぜひ使え。」

というから、かりておいた。じつは、たいへんうれしかった。その三円をがまぐちへ入れて、ふところへ入れたなり、便所へいったら、すばりとその中へ落としてしまった。しかたがないから、のそのそでてきて、

「じつは、これこれだ。」

と、清に話したところが、清はさっそく、たけのぼうをさがしてきて、

「とってあげます。」

といった。しばらくすると、井戸ばたでザーザー音がするから、でてみたら、たけのさきへがまぐちのひもをひっかけたのを、水であらっていた。それから口をあけて、一円札をあらためたら、茶色になってもようが消えかかっていた。

た。清は火ばちでかわかして、

「これでいいでしょう。」

とだした。ちよつとかいでみて、

「くさいや。」

といったら、

「それじゃおだしなさい、とりかえてきてあげますから。」

と、どこでどうごまかしたか、札のかわりに、銀貨を三円もつてきた。この三円は、なにに使ったかわすれてしまった。

「いまにかえすよ。」

といったきり、かえさない。いまとなつては、十倍にしてかえしてやりたくてもかえせない。

清がものをくれるときには、かならず、おやじも兄もないときにかぎる。おれは、なにがきらいだといって、人にかくれてじぶんだけとくをするほどきらいなことはない。兄とはむろなかがよくないけれども、兄にかくして、清からかしや色えんぴつをもらいたくはない。

「なぜ、おれ一人にくれて、にいさんにはやらないのか。」

と、清に聞くことがある。すると清は、すましたもので、

「おにいさまは、おとうさまが買ってあげなざるから、かまいません。」

という。これは不公平である。おやじはかんこだけれども、そんなえこひいきはせぬ男だ。しかし、清の目から見ると、そう見えるのだろう。まったく愛におぼれていたにちがいない。もとは身分のあるものでも、教育のないばあさんだから、しかたかない。たんにこればかりではない。ひいき目はおそろしいものだ。清は、おれをもつて、

（将来、立身出世して、りっぱなものになる。）

と思ひこんでいた。そのくせ勉強をする兄は、

「色ばかり白くつて、とても役にはたたない。」

と、一人できめてしまった。こんなばあさんにあつてはかなわない。じぶんのすきなものは、かならずえらい人物になつて、きれいな人は、きつとおちぶれるものと信じている。

おれはそのときから、べつだんなになるという考えもなかった。しかし、清かなるなというものだから、やっぱりなにかになれるんだろうと思つていた。

あるときなどは、清に、

「どんなものになるだろう。」

と聞いてみたことがある。ところか、清にもべつだんの考えもなかったようだ。たた、

「おかかえの車へ乗つて、りっぱなげんかんのある家をこしらえるにちがいない。」

といった。